120417　第１回「国語教育法」講義感想

タイトル集

感想集

1

○「羅生門」という教科書でもメジャーな物を、「高校生の授業風に読み直すことにより、更に物語を深く読めたと思う。母校での、最初に黙読し、段落分けするという流れを思い出し、自分の高校時代の授業を思い出す一つのきっかけとなった。思い出したところで、それをどこまで生かせるか、そのための努力をこの授業では成したい。

2

○月曜日６限の大熊先生に「授業を円滑に進めるため、極力火曜日７限に移動してほしい」との言葉を受けて、こちらの時間に移って参りました。よろしくお願いいたします。

　高校生の頃に先生の授業を受けたかった気持ちでいっぱいです。「羅生門」という作品の読解の説明が「羅生門」の解説に完結せず、他の作品の読解にも応用できる「読み」を伝授してくださる授業だなぁと生徒になりながら思いました。先生のような授業を目指したいと思います。一年間よろしくお願いいたします。中高の教育免許の取得を希望しておりますが、実習の高校の予定です。

3

○頭の回転が求められる授業だと思いました。本文から根拠を探し出すことからはじまり、そこから論理を展開していく、今後授業を作っていく中で非常に参考になりました。はっきりとした言葉で進められていたので、わかりやすいとも思いました。適切な表現をバチッとそこに入れ込むという作業が苦手だと感じたので、生徒に教える時には、しっかりとした言葉の感覚を磨きたいです。

4

○所々に面白い話をするのが楽しかったです。（子どもの話とか）　高校の時は、50分授業がものすごく長く感じたのに、今日はあっという間に終わってしまったような気がしました。板書をする時に、「○行開けてね」と言ってから書くのが、ノートが取りやすくて良かったです。生徒に当てながら授業をすると、やはり緊張感が出ると思いました。生徒からなかなか正解が出ない時に、ヒントを与えて考えさせるところが良かったです。また、生徒の発言を否定せずに、「いい所をついている」と肯定していたのが印象に残りました。

5

○中高の授業を久しぶりに受けたので頭が回らなかったです。今回の授業を聞いて次回の授業も聞きたくなりました。小説を解釈していく視点がこんな多様にあるのだと思いました。小説の本文そのものとは関係ない点、今日の場合は「芥」の字のことや、羅城門について触れたりすると、国語の教科書の本文を読解すること以外の面にも興味や関心が生まれると思いました。国語の授業には多くの知識が必要なのだと思いました。

6

○「羅生門」という近代小説を取り扱うにも、古典的知識は欠かせないものだなと感じました。構成も舞台設定も共通した構造が示されていて、とても分かりやすい授業でした。

　先生は「羅生門」を生徒に教えるにあたって、どの位の時間を使って準備しているのですか？とても気になります。

7

○授業を受けて感じたのは、しっかりと考えることができるという点でした。ある程度の答えがしぼれる環境に生徒をおいて、思考を集約していると感じた。

　本文に直接関係しているわけではないが、作者の意図がこうであるといったことや、小説を読ん

でいく中で必要な知識を織り交ぜたりすることで、生徒の知的好奇心を刺激し、授業の集中を保っていたと感じた。さらに、ときおりジョークをはさむことで、頭をリフレッシュさせたり、授業ってこんな風に行うんだと考えさせられた。とても面白い授業で、高校生に戻った気分でした。

8
○答え→（から）理由を探し、それが全体のテーマにつながっていく。「構成」もそうですが、舞台設定がとても明確に見えて、とても楽しかったです。作者による作品の深さにふれられたようで、もっと読み込みたいと思えました。最初に全て探し出させるのではなく、追って考えさせるので、その都度文章の目を通し、内容がよく頭に入りました。
　ただ、私は何度もこの作品を読んでいますが、初めて触れる生徒にはとても時間がかかるのではないかと思いました。平安の知識が無いとイメージしにくい単語も多いですし。（イラストはありますが）　高校では何時間分の授業内容なのでしょうか？

9
○「羅生門」＝「境界の物語」であることは、初めて気づきました。国語の授業でも小説を扱う上で、この作品が何の象徴なのか、何のテーマかを先生は話したかもしれないのに、いつも板書の追われて発見という概念を授業に持てずにいた気がします。僕が授業をやるうえで守りたいのは、板書を少なくし、授業の中で理解や感動を提示できる方法をしていきたいことです。

１０
○授業のテンポがすごくいいと思いました。つかみから、音読、生徒に発表させるまで、先生が気持ちよく引っ張ってくれるので、集中力のとぎれが全然ありませんでした。ほどよいヒントを生徒に与えてくれるのもいいと思います。現代文は考えれば何通りも答えが出せてしまうので、ある程度範囲を限定してやると手詰まりにならず、すごく考えやすかったです。あと、まちがえてしまった回答も切り捨てずにコメントを残すところに、なんとなく好感を覚えました。

１１
○読み始め前に今回の授業での課題設定が明確になされていたので、課題のことを頭の隅に置きながら読んでいくことができたので良かった。また、たとえ生徒が先生の求める答えと違っていても、全部を否定せずにその答えからうまく授業を展開していったので、その状況に合わせた対応ができる知識や話術は必要なことだと思った。脚注や絵、図といった本文以外のところも大切だと教えることも大切だと思った。個人的に、自分が高校生の時にされた質問と同じ質問ばかりがされていたので、小説において大切なことは、やはり先生や教え方が変わっても変わらないことだと思ったし、違う質問・課題も考えながら授業を受けていた。ありがとうございました。

１２
○３・４年ぶりに「羅生門」の授業を受けましたが、「下人のいた場所」という基準で構成を考えたり、時間・場所・主人公の「境界」という観点で「羅生門」を読み解いていったことが新鮮でした。また、授業の仕方では、作者の姓の意味、数字や脚注にも丁寧に注目する点、テンポ良く解説したり考えさせたりするという点が、とても参考になりました。

１３
○一番最初の授業に入る前に、芥川について触れたことによって生徒の関心をひきつけていて、授業にひきこまれていくように感じました。私の経験では、いつも生徒に本文を読ませるという形式だったのですが、先生が読むというのは何か意図があるのでしょうか？　授業を受けた印象では、声に抑揚があり、わくわくしながら一緒に読み進めることができました。板書や授業内容に関しては、共通のテーマなど、こうやってまとめてあげれば分かりやすいのだと思ったのと同時に、今回の授業が来週の授業への導入となっており、生徒としてとても興味のわく授業だと関心しました。

１４
○久しぶりに国語の授業というものを受けてみて、やっぱり自分は国語が苦手だったのだなぁと思いました。授業として生徒を引きつけやすい構成になっていて楽しかったです。本来はもっとゆっ

くりとした進度なのでしょうが、とても速く感じてしまいました。
　疑問に思ったのは、生徒に音読させなかったのは時間の問題だったのでしょうか？とても気になりました。いろんな生徒に注意を払って授業をつくっていくのは、とても地道なことなのだろうなと思いました。自分はもっと読解力をうけていかなければならないと思うので、頑張ります。

１５
○導入として作者（どんな人がこの作品を書いたのか）を確認し、冗談をまじえて興味・関心を持たせるという段階がとても大事だと感じました。そして、先生は結論に持っていくために、生徒の主体的な作業（ノートまとめ、発言、板書、回答）をうまく誘導されていました。一方的な話ではなく、参加型で、テンポがよく段階を踏んで授業が進んでいました。文学史の知識や５Ｗ１Ｈという教科の枠を越える場面など、多面的な知識・教養が凝縮されていて、生徒のひらめき・気づきを意識した構成にしていると感じました。すべての要素に共通するのは「リード力」だと思いました。

１６
○「境界」の物語であるということに、感動しました。今までも「羅生門」は読んできましたが、このように読み解けていなかったです。先生の授業のように、それぞれの段落からキーワードとなる言葉を抜き出し読み解いていくと、この小説自体にとても興味が持てると思いました。予備知識も必要なのだと痛感しました。教科書に載っていない情報を教えてもらえると、授業にも興味がわきますし、自分の知識が増える喜びもあると感じました。単に「羅生門」について学びながらも、教え方についても大いに学ばせていたきました。

１７
○その授業のその作品での目標を始めに明確にすることが非常に重要だと感じました。また、知識を絡めた冗談を言うことで、生徒が作品に入り込みやすくなり、知的な雑談も楽しく授業を受けることに繋がりました。生徒を参加させる形式で授業を進行することが、内容の深い理解に結びつくのだと思いました。

１８
○確か、題名と著者は黒板から消さない方が良いんですよね？　でもこの教室の黒板が小さいので仕方ないですね。冗談をはさみながらの授業の方が、やはり生徒としては楽しく、「次は何をするのかな？」とわくわくします。でも先生の立場からすると、その息抜きとも思われる冗談を考え得る（前もってorその場で）のは大変ですよね…。久しぶりに高校時代を想い出しました。とは言っても高校時代、授業のほとんどを寝て過ごしたのですが。なので、眠くならない、眠気を誘わない、眠気を起こさせない、めりはりのある授業づくりが大事だと思いました。ありがとうございました。

１９
○基本的に”生徒に答えさせる”、”生徒を当てる”ことで全員が授業に集中、あるいは本文に興味を持たせる為に必要であり、生徒とコミュニケーションを取ることもできるということが分かりました。また、答えを聞く際に、何度も「自由に答えて良い」ことを伝えることで、失敗することへのおそれが少なくなることに気づきました。

２０
○「羅生門」の構成を場面で分けるという作業を、自分が高校生の時にもやったということを思い出しました。今回改めて読んでみて、全てが”境界”になっているという細かい設定に驚きました。板書するのに、「ここを何行あけておいて」という指示があるのは、生徒にとってノートがとりやすいと思いました。またいつ指名されるか分からないという状況によって、生徒は緊張感を持ち、集中して授業に臨めるのだと思いました。

２１
○最後の”境界”は高校時代に習いました。あの時は単に「そうなのか」としか思わなかった自分でしたが、大学で民俗学を学んで、「境界は鬼にすむ世界」と知り、そうかここにつながってくるのかと思いました。このような体験を実習でも生かせたならと思います。知識とは応用してこその

ものだと思い知らされました。

２２
○まず先生の読み方がリズムがあったので、物語に入りやすかったです。構成分けもただやってみろというだけでは難しいですが、”場所”というキーワードがあったので、みんなそう違いなく、スムーズに分けられたと思います。また、先生が生徒の答えを聞いてすぐに否定せずに、ヒントを出したり、認めるような返し方をされていたので、生徒側からしても意見をいいやすい雰囲気で授業をこうやってつくっていくのかと感動しました。

２３
○「羅生門」の初回ということで、まず読解に入るんじゃなくて、構成や舞台を大きく捉えるというのは必要なことだと思いました。最後の境界は、ヒントが出るまでわかりませんでした。板書があまりなく（時間がなく）ても、私は先生の言うことをメモします。でも、高校生ってメモしますか？　どこまで板書すればいいか、加減等はあるのでしょうか？　あと、すごく緊張しました。久々にやって楽しかったです。適度な緊張感とたのしく盛り上がる時が上手にセットになった授業でした。

２４
○久しぶりの国語の授業はとても楽しかったです。授業はやはり準備をしっかりしておいて、また生徒が答えるであろうことも予想しておかなければならないと改めて思いました。自分が高校生の時は、結構受け身で、先生の説明を聞いて板書をうつすという形が多かったのですが、生徒自身に問題を提示して、自分で考えさせ、答えを述べる、という方が印象にも残るし、楽しさも味わえると思いました。来週も楽しみです。

２５
○物語の＜構成＞と＜舞台設定＞を確認するという内容でしたが、構成においては「羅生門」というキーワードを用いることで、４つの場面区分に統一感を持たせるという点、舞台設定においても”境界”というキーワードによって、主人公の年齢、刻限、季節、場所がつながりをもっていることを理解させる、という流れが、授業にまとまりを持たせるとともに、理解しやすいと感じました。また、一生徒ではなく、教員志望者として授業を受けるのは、全く心構えも授業の見方も変わることに気づき、驚きました。